

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)・2)・3)・4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。2)文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管および公開活用に関して、技術面・法律面を含めたガイドラインを作成する。3)被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。4)文化財に関する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（主任研究員）、安永拓世（主任研究員）、米沢玲（研究員）、小山田智寛（研究員）、寺崎直子（研究補佐員）、尾野田純衣（研究補佐員）	
【年度実績と成果】		
<p>○全所的な文化財情報の発信：通常は年4回アーカイブズWG協議会を開催してきたが、第1四半期は新型コロナウイルスの影響により、メールによる意見集約・情報共有を行い、第2四半期以降は3回（7月16日、12月3日、3月16日）、アーカイブの拡充と積極的に情報発信を行うための協議を行った。</p> <p>○当研究所が所蔵する今泉雄作・平子鐸嶺・田中一松による調査ノートと、京都工芸繊維大学が所蔵する土居次義による調査ノートと、東京国立博物館所蔵作品2点を交え、展覧会「日本美術の記録と評価—調査ノートにみる美術史研究のあゆみ—」を開催した。ウェブ展覧会も同時開催した。</p> <p>○売立目録デジタルアーカイブの改良と報告書の作成：元年度より資料閲覧室にて公開しているデジタルアーカイブの校正作業を進め、元年度に開催した研究会の内容を拡充した報告書を刊行した。</p> <p>○資料閲覧室の運営・管理 資料受け入れ数：新型コロナウイルスの影響により2年2月28日から資料閲覧室は閉室していたが、事前予約制を導入し6月10日より再開した。和漢書1,002件、洋書85件、展覧会図録・報告書等1,526件、雑誌1,086件（合計3,699件）・閲覧室利用状況：公開日総数67日・年間利用者合計660人</p>		
		 <p>展覧会のリーフレット</p>

年度計画評価

A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、新型コロナウイルスの影響により移動や外出の困難が生じる中、より広範なオープンアクセス需要への対応のため、当研究所の研究成果や所蔵資料の情報発信を積極的に行った。②独創性においては、当研究所が有する専門性・独自性の高い文化財情報の公開を念頭におき、画期的な『売立目録』のデジタルアーカイブの改良を進め、報告書を刊行した。③発展性においては、国内外の関係機関と連携して、国内外への情報発信を積極的に行い、今後の展開に向けての取り組みを進めた。④効率性においては、元年度より稼働した図書館システムを活用し、入力作業と情報発信を効率よく行った。⑤継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業を年間通じて順調に進めた。あわせて、高い利便性と安定した資料の保全の双方に配慮しつつ、資料閲覧室としての公共性と高い専門性を保持した運営を行った。新型コロナウイルスの影響により閉室期間があったため、実際の利用者数は元年度に較べて減少したが、オープンアクセス資料の増加や遠隔複写サービスなどで対応した。以上の理由により年度計画を上回る成果をあげることができた。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】**【実績値・参考値】**

- ・美術に関する情報公開 1件（ア）
- ・研究報告書の刊行 1件（イ）

定量評価

—

ア 展覧会「日本美術の記録と評価—調査ノートにみる美術史研究のあゆみ—」（東京国立博物館本館14室、7月14日～8月23日、総合文化展の入館者数：15,737人、「きもの展」をあわせた総入館者数：86,543人）

イ 『売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望-売立目録の新たな活用を目指して-』A4版168ページ、3年3月。

中期計画評価

A

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	2年度は、当研究所の代表的なコレクションである売立目録のデジタルアーカイブの改良を進め、研究支援を継続すると同時に広く情報発信を行うため、報告書を刊行した。新型コロナウイルスの影響は受けながらも、オンラインでできるサービス提供の強化を行い、公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。今中期計画期間を通して、当研究所が行う文化財の調査研究とその成果を集約しつつ、データベースの継続的拡充を行い、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実を推進したことにより、中期計画を十分に達成した。以上の理由から、今中期全体を通して当初の計画を上回る成果をあげることができた。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に〇）】 〇高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）、Yanase, Peter（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、呉 修喆（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、厩 素妍（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）	
【年度実績と成果】		
<ul style="list-style-type: none"> 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている報告書抄録、報告書の各データベースに関して、データを入力・更新した。公開データベースを更新した。 全国遺跡報告総覧の登録データ件数（カッコ内は昨年度件数） PDF数 27,761件（24,495）、書誌登録数 88,067件（68,769）、 遺跡抄録件数 135,663件（130,016） 全国の博物館等の文化財関係機関が作成している文化財動画の情報を集約した「文化財動画ライブラリー」を公開した。既存の文化財報告書や文化財イベントと類似度を自動算出しており、関連コンテンツを自動提示できるようになった。公開の際には、公開3日間にテレビ番組2件、全国の新聞29紙に取り上げられた。400以上の動画が公開され、時代や地域別に検索できる。 		
		 <p>文化財動画ライブラリー</p>

年度計画評価	A				
【評定理由】					
①適時性においては、最新のデータを提供して充実を図っている。国民から活発に利用され、文化財情報のインフラとして機能している。新型コロナウイルスによる影響でリアルなイベントが開催困難であったが、デジタルの強みを活かして文化財動画ライブラリーなどを構築した。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させているとともに、データベースの機能強化を実現している。全国の自治体や博物館など既に1,301機関が本事業に参加している。④継続性においては、大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。これらより、内容豊かなデータベースとして著しく発展していることから、順調に事業が推移していると判断し、全体の評定をAとした。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	A	
【目標値】	【実績値・参考値】()は元年度末の値 (実績値) 公開データベースの件数 30 (25) 「文化財動画ライブラリー」「史的文字データベース連携検索システム」を新たに公開した。 (参考値) 公開データベースへのアクセス件数 14,183,774件 (12,615,841) 全国遺跡報告総覧 登録データ件数: 252,410 (216,127) 年間ダウンロード件数 2,320,607 (1,670,343) 年間ページ閲覧数 78,707,144 (68,184,920) 論文発表 5件 (ア) 口頭発表 4件 (イ)				定量評価
・文化財に関するデータベースの公開件数 24件					A
ア論文 高田祐一「画像認識技術の文化財データへの適用実験」他4件、イ研究発表 高田祐一「考古学・文化財資料3D計測の意義を考える 知的財産権・著作権の観点から」他3件					

中期計画評価	A				
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。				
評定理由	文化財情報に関する基礎的な研究を積み重ねつつ、継続性が重要なデータベースの充実を着実に進めている。他機関と協力して進める大規模データベースである全国遺跡報告総覧は、頻出用語表示機能などのデータ解析機能を付加し、データのダウンロードも200万件以上に達するなど、中期目標を超える成果を継続して達成しており、今後の発展も引き続き期待される。このため、今中期全体を通して、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充並びにデータベースの充実を達成できたことから、中期計画を上回る成果をあげることができたと判断した。				

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-4)	<p>①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。</p> <p>4)文化財に関する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。 【中期目標・計画上の評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書、雑誌等の公開に関する取組状況 (資料閲覧室・図書資料室の開室日数、利用者数、文化財に関する資料・図書等の総件数) ・文化財に関するデータベースの公開件数(前中期目標の期間の実績以上) ・(関連指標)データベースのデータ件数 ・(関連指標)データベース等へのアクセス件数
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ(責任者に○)】○貴村好隆(連携推進課長) 渡 勝弥(係員) 伊藤久美(事務補佐員) 山内章子(事務補佐員) 中西晶子(事務補佐員) 堀内千嘉(事務補佐員) 永岡美和(事務補佐員) 久保純子(事務補佐員) 志賀明美(事務補佐員)	
<p>【年度実績と成果】</p> <p>・資料の収集・整理・保管・提供 収集・整理・保管については、例年どおり滞りなく実施した。提供については、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として対面カウンターに飛沫防止シートの設置、閲覧室前に手指除菌スプレーを設置した。一般利用者の閲覧については、同時利用2名の完全予約制とし、資料室利用状況カレンダーをウェブサイト上に公開して空席状況を表示し、資料室の予約フォームより空席時間に予約を入れてもらうことで密となることを避けた。</p>		
購入図書	225 冊	 <p>新型コロナウイルス感染拡大防止対策として飛沫防止カーテンを設置及び、閲覧席を4人掛けから1人掛けに変更</p>
寄贈図書	7,729 冊	
雑誌	3,071 冊	
一般利用者	193 人	
利用冊数	1,814 冊	
来館者複写件数	454 件	
遠隔利用：複写受付件数	372 件	
貸借貸出冊数	118 冊	

年度計画評価	A				
<p>【評定理由】</p> <p>下記各観点から評価を行った。①適時性において、新型コロナウイルス感染拡大防止対策としてカウンターに飛沫防止カーテン及び手指消毒薬を設置。コロナ禍においても閲覧可能な体制を整備した。②発展性において、所外から閲覧室の利用状況が確認できる利用状況カレンダーを設置した。③効率性において、閲覧室が密になることを防止するため、ウェブサイト上に資料室の予約フォームを設置し、完全予約制として閲覧室を効率よく利用できるよう配慮した。④継続性において、緊急事態宣言解除以降、閲覧室を閉室することなく、一般利用者からの資料利用要求に応えることができた。以上の観点から本事業は順調に推移していると判断した。</p>					
観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	A	A	A	
【目標値】	【実績値・参考値】				定量評価
	(参考値)	資料閲覧室・図書資料室の開室日数	147 日		
	資料閲覧室・図書資料室の利用者数	161 人			
	文化財に関する資料・図書等の総件数	488,414 件			

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	中期目標期間を通じて、元年度までは計画通り所期の目標を達成してきた。2年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発令中は、閲覧室を閉室することとなったが、この期間を除いては、奈文研が所蔵する資料を一般利用者に提供を行った。特に、ウェブサイト上に利用状況カレンダーや予約フォームの設置することで利便性の向上が図られたことから、中期目標期間の最終年度として、当初の目標を上回って達成していると判断し、A評価とした。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイト充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』(年3冊) ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ(責任者に○)】○齊藤孝正(所長)	
【年度実績と成果】 ・『東京文化財研究所年報』2019年度版 ・『東京文化財研究所概要』2020年度版 ・『東文研ニュース』年2回(72~73号) ・『美術研究』(431号)(8月) ・『美術研究』(432号)(12月) ・『美術研究』(433号)(3年3月) ・『令和元年版 日本美術年鑑』の編集作業を進める。その内容は以下の通り。 2018(平成30)年美術界年史、美術展覧会(企画展、作家展、団体展)、美術文献目録(定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献(企画展、作家展))、物故者 ・『無形文化遺産部研究報告』15号(3年3月) ・『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』(3年3月) ・『保存科学』60号(3年3月)		



保存科学 60号表紙

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、『美術研究』432号で新型コロナウイルス感染状況下での展覧会動向を紹介できたことが評価される。②独創性においては、海外編集委員からの推薦論文として、近年進展が目覚ましい中国・韓国の近現代美術に関する論考を翻訳掲載した点が評価される。③発展性においては、地域の文化遺産の活用が叫ばれる中、『美術研究』431号においてリンク・データを用いることで地域の文化遺産情報を集約させ、その活用への道を示した点が評価される。④効率性については、『保存科学』において、編集委員を交代し、作業効率を上げた。また『美術研究』の編集作業で元年度同様、刊行物アーカイブシステムを本格的に導入した点や、電子メール送受による校正作業を積極的に実施して刊行に必要となる時間の節約に努めた点が評価される。⑤継続性については、定量評価においては、新型コロナウイルスの感染リスクにより、年間を通じて在宅勤務等の大幅な勤務体制変更を余儀なくされる中で、11点の定期刊行物を刊行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	B	B	B	B
【目標値】 ・定期刊行物等の刊行件数 12件	【実績値・参考値】				定量評価
	(実績値) 定期刊行物等の刊行件数 11件(以下のとおり) 『東京文化財研究所年報』2019年度版 刊行部数 400部 『東京文化財研究所概要』2020年度版 刊行部数 2,700部 『東文研ニュース』72~73号 刊行部数各 1,600部 『令和元年版 日本美術年鑑』 刊行部数 600部 『美術研究』431~433号 刊行部数各 400部 『無形文化遺産部研究報告』第15号 刊行部数 600部 『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』 発行部数 700部 『保存科学』60号 発行部数 650部				—

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	最終年度である2年度は、新型コロナウイルス感染リスクにより年間を通じて在宅勤務等の大幅な勤務体制変更を余儀なくされる中で、概ね予定どおり出版することができた。以上の理由から、中期計画の5か年を総括して順調に研究業務が遂行されたといえる。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)2)3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。1) 定期刊行物の刊行、『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等・現地説明会
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○貴村好隆（連携推進課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、渡 勝弥（連携推進課）ほか	
【年度実績と成果】		
<p>1) 定期刊行物の刊行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良文化財研究所概要 2020 10月刊行、2,700部 ・奈良文化財研究所紀要 2020 9月刊行、3,000部 ・奈文研ニュース「No.77」6月、「No.78」9月、「No.79」12月、「No.80」3月、各3,000部 ・埋蔵文化財ニュース「No.182」2月、「No.183」「No.184」「No.185」3月、各2,500部 <p>2) 現地説明会等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月28日興福寺鐘楼・東金堂院の発掘調査(平城第625次)現地見学会 於奈良市登大路町(参加者606人) (更に興福寺鐘楼・東金堂院の発掘調査(平城第625次)のドキュメンタリー動画を作成し、「なぶんけんチャンネル」での配信を実施) ・11月7日藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥藤原第205次)現地見学会 於橿原市高殿町(参加者480人) <p>3) 講演会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第12回東京講演会タイトル「奈良の都の暮らしぶりー平城京の生活誌ー」 講演者：前川、和田、桑田、小田、森川、山本、神野(視聴申込者804人) 新型コロナウイルス感染拡大防止のため東京有楽町での定期講演をとりやめ、10月23日～11月5日の間オンデマンド配信で実施した。その後も「なぶんけんチャンネル」で配信した。 ・1月30日文化財防火デートークイベント「災害から守ろう！私たちの文化財」(なぶんけんチャンネルにおけるライブ配信、文化財防災センターとの共催) 講演者：森井順之(文化庁)、鍵谷暢彦(奈良市)、村田泰輔(奈文研)、高妻洋成(文化財防災センター) <p>4) シンポジウム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12月12日第24回古代官衙・集落研究会「古代集落の構造と変遷」(参加者126人) 新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催で実施した。 ・2月9日研究会 水中遺跡保護行政の実態Ⅲ(参加者100人) <p>5) 体験型イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月12日～14日「奈良の都の木簡に会いに行こう!2020」子供達が発掘現場から持ち帰った木簡を含む土の洗浄・選別作業や木簡の解説等の体験を行った。(参加者19人)(日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」採択事業) <p>6) ウェブサイトの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈文研ブログ「コラム作實樓」を2回更新、当研究所研究室を紹介する「巡報研究室」毎月継続配信した。 ・ウェブサイト上に「なぶんけんチャンネル」を開設した。 		



奈文研ニュース

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性については、調査研究成果を適時に刊行し、現地説明会開催、ウェブサイト公開とも適時に情報を発信した。②独創性については、調査研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性については、個々のデータベース登録数も増え、多様なブログ、コラム等を更新することによりホームページの内容を充実させた。また、当研究所の調査研究の成果を多角的に発信するために、ウェブサイト上に「なぶんけんチャンネル」を開設したほか、体験型イベントを実施した。④継続性については、定期刊行物、講演会、ウェブサイト公開など従来から継続的に実施し、恒久的な提供が認められる。定量的評価の観点においては、新型コロナウイルスの影響により、例年実施している講演会や体験イベントを中止せざるを得ない状況となったため開催回数が減少した。しかしながら、講演会等は、例えば東京講演会については、感染症拡大防止の観点から開催方法をオンデマンドによる配信に変更し、コロナ禍における新たな研究成果の発信に取り組むことができた。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】				【実績値・参考値】	
(1) 定期刊行物等の刊行件数 10点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 10回				(1) 定期刊行物等の刊行件数 10点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 6回	
				定量評価	
				(1) B (2) D	

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。
評定理由	中期目標期間を通じて、定期刊行物及びウェブサイトにおいては調査研究の成果等を公表するものとして、計画通り順調に刊行や更新ができた。また公開講演会や現地説明会等については、元年度までは計画通り所期の目標を達成したが、2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の為に定期講演会は開催を見送ったが、東京講演会はオンデマンド配信等オンラインでの開催を試み、従来の会場参加型の参加者数(昨年度464人)よりも多くの視聴申込者(804人)があり、その可能性が確認できた。以上を含めて、今中期計画期間全体を通して事業を実施できたと判断し、Bと評価した。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、小野真由美（主任研究員）、野城今日子（アソシエイトフェロー）ほか	
【年度実績と成果】 ○10月30日、一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。例年外部講師を交えての2日間開催であったが、新型コロナウイルスの感染防止を考慮し、内部講師2名による1日の開催とした。 ○当研究所・文化財情報資料部より2名の講演を行った。講演テーマは次の通りである。 ・塩谷純（文化財情報資料部長）「近代日本画の“新古典主義”－小林古径の作品を中心に－」 ・二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長「タイに輸出された日本の漆工品－王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの漆屏を中心に－」 ○外部からの聴講者34名を得た。		
		
		オープンレクチャーの様子

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、新型コロナウイルス感染防止の観点から、定員を絞って抽選制とし、検温や消毒などの防止策を徹底した。結果、定員の4倍近くの応募があったが、34人の参加をみた。参加者からのアンケート結果では、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせて92%の回答を得ることができ、時宜に適った講演テーマにて実施できた。②独自性においては、未発表の最新の研究成果を、新知見を織り交ぜて公開することができた。③発展性においては、いずれの講演も今後の調査研究による進展が期待されるものであり、そうした発展的成果を公開することができた。④継続性においては、「古典の日」にちなみ長年継続して開催しており聴講者の高い満足度を確認できた。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B
【目標値】 ・講演会の開催回数 1回	【実績値・参考値】 ・1回				定量評価 B

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	2年度は新型コロナウイルスの影響により、参加者を制限することになったものの、今中期計画期間を通して、質の高いセミナーを展開でき、参加者から大変良い評価をいただいた。以上の理由から、中期計画の5か年を総括して順調に遂行されたといえる。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイト充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 3)ウェブサイトの充実 ・東文研総合検索システム ・東京文化財研究所刊行物一覧 ・学術情報リポジトリ
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、中村亮介（アソシエイトフェロー）、安岡みのり（研究補佐員）、磯山浩美（研究補佐員）、藤井糸子（研究補佐員）	
【年度実績と成果】		
○ネットワーク環境の整備・充実 ・仮想化サーバ及び同サーバのバックアップシステムの更新を行うとともに、外部公開用ウェブサーバ、NTP、DNSの仮想化を行い、ネットワークの安定運用に努めた。		
○情報セキュリティの強化 ・元年度に引き続き、各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しセキュリティ水準の維持向上に努めた。		
○情報蓄積・発信機能の強化 ・既存データベースへのデータ追加や機能改善を実施した。また、元年度に引き続き、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携し、データベース管理システム Oracle による所内データベースを適宜改良して利便性を向上させた。特に、4月～5月にかけての緊急事態宣言発令中にはソーシャルメディアによる文化遺産の現状や国際機関の取り組みに関する情報の発信に努めた。		
○研究成果公開 ・論文や学会発表を通じてデータベース構築やその活用に関連する成果を公表した。また、プロジェクト「文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究」と連携しハンズオン・セミナー「文化財写真入門—文化財の記録としての写真撮影実践講座」を8月24日に上原美術館で、3年3月12日に東北歴史博物館で開催し、それぞれ11人、14人（実技）の参加を得た。また、12月23日には「シリーズ「デジタル画像の圧縮～画像の基本から動画像まで～」その1 デジタル画像の基礎」を東京文化財研究所で開催し、37人が参加した。		

年度計画評価	A				
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースへのアクセス件数にも裏付けられるように、データベース整備は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえ、時宜に適ったものである。また、ソーシャルメディアを活用した情報発信も、時宜にかなっている。②独創性においては、公開データベースに無料のデータベースエンジン MariaDB とウェブコンテンツを統合的に管理する無料の content management system (CMS) である WordPress を利用して独自開発している。③発展性においては、横断検索が可能で、画像及びテキストの両方を扱えるデータベースの構築を継続、今後のデータベースの多様化にも対応した。④効率性においては、当研究所職員を主な講師とするセミナーの開催により所外に効果的に活動内容を伝達できた。⑤継続性においては、ウェブサイト更新による情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に実施した。⑥定量評価について、目標値の167%のデータベースを継続して公開した。よって所期の計画を上回り、事業が推移したと判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	B
【目標値】 ・データベースの公開件数 18件	【実績値・参考値】 ・(実績値) データベースの公開件数 33件 ・(参考値) データベースのデータ件数 1,715,186件、データベース等へのアクセス件数 4,078,322件・学会発表件数 1件(ア)・論文 2件(イ)				定量評価 A
ア 小山田智寛、二神葉子、逢坂裕紀子、安岡みのり「デジタルコンテンツと継続性：明治大正期書画家番付データベースを例に」（デジタルアーカイブ学会第4回研究大会スピンオフ研究発表会、オンライン、7月5日） イ 二神葉子「尾高鮮之助撮影バーミヤーン西大仏の写真による三次元空間画像の作成」『保存科学』70号、3年3月ほか1件					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。
評定理由	上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成した。情報機器の更新による所内情報システムの簡素化と高度化を実現、調査研究環境を整備した。また、独自開発の横断可能なデータベースの公開件数増及び検索機能の充実を図り、その成果も発信することができたため、今中期計画を総括して順調に遂行したといえる。次期中期計画でも引き続き、調査研究遂行のための情報システムの整備や、成果発信の手法、及びそれらを活用しての調査研究を実施する。

中期計画の項目	2-(4)-③-1)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。 1) 特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○加藤真二（企画調整部展示企画室長）、○石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）ほか	
【年度実績と成果】	<p>(1) 平城宮跡資料館</p> <ul style="list-style-type: none"> 特別企画展「古代のいのり 一疫病退散！」(6月16日～7月19日)(30日間、2,846人)。動画配信サイト「なぶんけんチャンネル」にて関連動画1本を配信。 夏期企画展「奈良の都の考古学 一発掘された平城2019/古代のいのり 一疫病退散！」(7月23日～8月30日)(34日間・3,968人)。「なぶんけんチャンネル」で関連動画1本を配信。 秋期特別展「地下の正倉院展 一重要文化財 長屋王家木簡一」(10月10日～11月23日)(39日間・14,670人)。「なぶんけんチャンネル」にて関連動画3本を配信。 新春ミニ展示「平城京の丑」(3年1月5日～1月31日)(24日間・1,425人) 関連展示「鬼神乱舞一護る・祓う・鬼瓦の世界一」(3年1月23日～3月28日)於：平城宮いざない館(64日間・31,530人) 新型コロナウイルス感染症対策のため、4月1日～5月31日、多言語化ならびに地震対策のため3年2月23日～3月12日を臨時閉館とした。 <p>(2) 飛鳥資料館</p> <ul style="list-style-type: none"> 特別展「飛鳥の石造文化と石工」(8月4日～9月22日)(44日間・3,212人) 秋期企画展「第11回写真コンテスト作品展 飛鳥の祭」(10月16日～12月6日)(45日間・5,114人)65点 冬期企画展「飛鳥の考古学2020」実施(3年1月22日～3月14日)(45日間・2,371人) 新型コロナウイルス感染症対策のため、4月1日～5月31日臨時閉館、特別展の開催時期と回数を調整した。 <p>(3) 藤原宮跡資料室</p> <ul style="list-style-type: none"> ロビー展示「飛鳥寺旧境内の調査(飛鳥藤原197-6次)」、「藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第200次)」、「石神遺跡土坑 SK1244・1245 出土土器(石神遺跡第7次)」(12月4日～12月28日)を実施。 新型コロナウイルス感染症対策のため、4月1日～6月1日、6・7月の土日を臨時休館。また、電気工事のため、2月23日～3月7日に休館した。 	



平城宮跡資料館「地下の正倉院展」



飛鳥資料館「飛鳥の石造文化と石工」

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】	<p>① 適時性においては、平城で新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況下、奈良時代における感染症拡大への対応を展示した「古代のいのり 一疫病退散！」展を開催した。また、同じく、平城の「地下の正倉院展」は、長屋王家木簡の重要文化財指定にあわせた展示であった。</p> <p>② 独創性においては、飛鳥資料館の「飛鳥の石造文化と石工」は、飛鳥資料館が進めている石造物の複製制作を絡め、飛鳥地域の古代の特徴でもある石造物を取り扱ったものであり、飛鳥資料館ならではの企画であった。</p> <p>③ 発展性においては、平城宮跡資料館の展示に関しては、動画を5本作成し、動画配信サイト「なぶんけんチャンネル」にて配信し、今後の展示活動への動画の活用について礎を構築することができた。</p> <p>④ 継続性においては、各館の特別展・企画展は、ほぼ定期で継続的に実施するが、内容を変えつつ行っている。平城の「地下の正倉院展」は14回、飛鳥の「写真コンテスト」は11回を数えている。今後も新たな内容で継続する予定である。</p> <p>定量評価について、平城では、平城宮いざない館で行った関連展示を含め、特別展・企画展を年間5件開催した。以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。</p>				
--------	---	--	--	--	--

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	B	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数4件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展開催件数4件	(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数4件、関連展示1件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展開催件数3件 ※新型コロナウイルスの影響により、夏期特別展「日本人と古代仏教一仏教と文字文化の考古学」(7月19日～9月1日)を中止。 (参考値) (1) 平城 入館者数37,913人 開館日数239日 図録等実績リーフレット等2件(ア・イ) (2) 飛鳥 入館者数15,664人 開館日数252日 図録等実績リーフレット等2件(ウ・エ) (3) 藤原 入館者数4,417人、開館日数265日	—

ア『地下の正倉院展一重要文化財長屋王家木簡一』(A4判フルカラー16ページ 10月10日発行)
イ『鬼神乱舞一護る・祓う・鬼瓦の世界 Legend of Exorcism』(A4判フルカラー16ページ 3年1月23日発行)
ウ 飛鳥資料館図録第73冊『飛鳥の石造文化と石工』(A4判フルカラー39ページ 8月4日発行)
エ 飛鳥資料館カタログ第37冊『飛鳥の考古学2020』(A4判フルカラー20ページ 3年1月22日発行)

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、公開施設における特別展・企画展の開催件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、4月1日～5月31日を臨時休館し、飛鳥資料館では、特別展・企画展の開催件数が目標値に達しなかったが、平城宮跡資料館では、関連展示を含め、5件行うことができた。また、動画配信を開始するなど、情報公開機能を強化することができた。新型コロナウイルス感染症による波乱が最終年度にあったものの、今中期計画期間を通して展示の充実、来館者の理解促進を行うことができたことから、中期計画を遂行できたと判断した。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。 2) 定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○貴村好隆（連携推進課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、岩井靖子、京牟礼薫（連携推進課事務補佐員）	
【年度実績と成果】		
1) 解説ボランティア研修等 解説ボランティアの育成に資するため、平城宮跡資料館及び平城宮跡歴史公園平城宮いざない館（受託事業）における特別展、企画展にかかわる解説ボランティアに向けての展示解説研修の実施、発掘調査の現地説明会、及びボランティア勉強会を実施した。 ・平城宮跡資料館「地下の正倉院展」展示解説研修（Ⅰ期）、（Ⅱ期）、（Ⅲ期） 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示解説資料を郵送にて送付し研修とした。 ・平城宮跡資料館新春ミニ展示展示解説研修 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示解説資料を郵送にて送付し研修とした。 ・平城宮跡歴史公園平城宮いざない館「平城宮跡歴史公園特別展」展示解説研修 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示解説資料を郵送にて送付し研修とした。 ・解説ボランティア向けの発掘調査の資料の送付 （興福寺鐘楼・東金堂院発掘調査（平城第625次）6月5日）、（平城宮東方官衙地区発掘調査（平城第621次）2月17日） 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、現地見学会資料を郵送にて送付し研修とした。		
2) 解説ボランティアに関する会議 ・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務局が一体となったボランティア活動を検討する会議、毎月1回開催） ・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と奈文研職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月1回開催） 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、メール配信及び書面送付により開催した（毎月1回） ・平城宮跡歴史公園ガイド連絡協議会（NPO法人平城宮跡サポートネットワーク、奈良県（平城京再生プロジェクト）、国交省（平城宮跡管理センター）4者で行う国営飛鳥歴史公園内のボランティア活動等の情報共有、意見交換を行う会議：2か月に1回開催）		
3) 新規解説ボランティアの募集、登録 ・今期（30年1月から2年12月）の解説ボランティア活動登録期間が最終年を迎えるにあたり、次期に向けて既存登録者の継続登録の意思確認を行うとともに新規解説ボランティアの募集、登録を行った。		

年度計画評価	B				
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性については、解説ボランティアへの当研究所からの最新の情報提供、解説ボランティアからの改善等の意見を随時取り入れるための研究部と事務局が一体となって組織した「平城宮跡解説ボランティア懇談会」を定期的に開催したことにより、研究所におけるボランティアの情報発信内容等が効果的に進んでいる。②独創性については、解説ボランティアの資質向上のため、平城宮跡における当研究所の最新の調査研究成果を踏まえた展示に関連する解説研修を書面送付により適宜実施した。③発展性については、ボランティア懇談会において解説ボランティアからの意見を随時取り入れるようにすること及び、新規解説ボランティアの募集、登録を行ったことにより、活動の活性化や運用改善が進められた。④継続性については、ボランティア連絡会議を定期的に開催し、ボランティアとの意思疎通を引続き行ったことにより、新制度による活動が順調に進んでいると判断した。新型コロナウイルスの影響により研修、会議等を通常の形で行うことが難しい状況であったが、開催方法等に工夫をする等の措置を行った。なお、2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から解説ボランティアが実際に解説活動を行うことは叶わなかったが、新型コロナウイルス収束後の活動再開を見据え、必要と考えられる対応策は全て実施したところであり、所期の目標を達成したと考える。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) ・解説ボランティア登録人数：130人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：0人（コロナウイルスにより活動中止） ・解説活動日数：0日（コロナウイルスにより活動中止）				定量評価
					-

中期計画評価	B
中期計画記載事項	宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。
評定理由	中期目標期間を通じて、元年度までは計画通り所期の目標を達成してきた。2年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のために解説ボランティアの活動自体を休止し、併せて対面での研修や会議の開催は見送ったが、当研究所の研究成果に関する資料の郵送による研修やメールによるボランティア連絡会議を開催し、継続的にボランティアの育成と意思疎通を図るなど、上記の年度計画の評定理由に記載のとおり、必要な対応は講じた。以上を含めて、今中期計画期間全体を通して事業を実施できたと判断し、B評価とした。